

大きな都市にない価値をいかに育てるか

早稲田大学名誉教授 宮口 侗迪

このような重要な会にお役目を与えていただき、光栄に存じております。

私は平成に富山市に合併した富山県の岐阜県境の旧細入村の出身でありまして、大森彌先生が座長を務められる全国町村会の研究会に入れていただいて30年ほどになります。町村会にはもともと親しみを感じ、小さな自治体に都市にはないどのような価値があるのかということ、考え続けてきた人間でございます。

私の出身の村は今、合併して一部過疎という扱いになっています。全国926町村のうち過疎指定は6割近くですが、特別の条件を持つ地域を別として、過疎指定であるなしにかかわらず人口減少・高齢化に悩む町村が多くを占め、そしてほとんどの町村が小さな中心地と、その周りの過疎的な農山漁村的な集落から成っていると思います。

私はこの15年ほど、総務省の過疎問題懇談会の座長を務めてまいりました。今年は過疎法が初めて出来て50年が経過した年で、現行の過疎地域自立促進特別措置法の期限が来年3月となっております。懇談会では今年の春に「過疎地域の持続的発展の実現」と題する新たな過疎対策についての提言をまとめさせていただきました。

提言では、過疎地域のめざすべき方向を、先進的な少数社会、言い換えれば豊かな自然のもとでの低密度居住地域と位置付けています。これは私流に言いかえると、ないものねだりはしないで、少数の人口によって都市にない価値を高めていこうということでもあります。

そして提言では、このような方向を実現するための、外部からの参入も含めた人材の育成を強調していることが、重要な点であると思っております。

過疎法の出発点は都市部に対する生活基盤の格差是正であり、困っているから支援するという考え方でありましたが、自立促進法の議論の頃から、過疎地域にどんな役割を果たしてもらおうべきかというニュアンスが、加わってまいりました。今回の提言ではこれを一歩進めて、「過疎地域の価値・役割と過疎対策の必要性」というはっきりした言い方をしました。それは大方の国民に、過疎対策の必要性と予算化を少しでも理解してもらうためでもあります。

幸いアンケートによると、食料や水の供給、日本人の心のふるさと、多様な生態系などという点で過疎地域の役割や価値を評価し、都市部の住民を含めて7割を超える国民が、過疎地域に対する支援の必要性を認識していただいています。

法律によって指定されるか否かは別として、ほとんどの町村は、過疎的な農山漁村地域を抱えておられます。町村関係者は、そのような地域の暮らしをどのように守り、そして守りだけではなく、都市にない価値をいかに高めていくかという認識を、強く持っていただきたいと思っております。

私が以前から主張してきた、農山漁村の、都市にない基本的な価値は次の2点であります。1つは自然から価値を取り出す農林漁業のワザが、しっかりと存在することで、これは長い年月をかけた人の営みが到達したワザであり、これを少し大げさに人間論的価値と言っています。もう1つは、集落を中心に暮らしを支えあってきた地域社会の存在で、これを社会論的価値と言っています。

最近、都市育ちの若者の農山漁村への関心が高まっていることが、アンケート等ではっきり示されています。地域おこし協力隊も昨年5、500人を超えました。このかなりの部分が、農山漁村的な

地域で活動に従事しています。地元の人には過去を振り返り、人口減少や高齢化がどのくらい進んだかを常に気にしますが、彼らは、現時点での都市、とくに大都市の暮らしと、田舎の暮らしを素直に対比して、都市にない魅力を感じ取っていると考えられます。

協力隊の報告からも、先に示した2つの点、すなわち自然を巧みに使うワザと、地域の人たちの都市にはない結びつき方に対する驚き、さらには評価が語られています。都市から遠い過疎的な小規模な地域ほどその価値が見えやすく、都市に育った若者は都市との違いに惹かれ、都市にはない価値を感じ取っているのではないかと、受け止めています。ただ、高齢者によって営まれている小規模な農林漁業は、そのままで存続は難しく、集落の支え合いも、世帯数減少の中で、実質的な動きが難しくなり、形ばかりが残って暮らしに疲れるようになる可能性がございます。

私は、この2つの価値をいかに発展的に持続させるかが、今の時代の町村に共通する基本的な課題と考えております。

小規模な単位での手仕事の農業は、家と土地を長年守ってきた高齢者の暮らしを穏やかに支えるものではありませんが、そのままの形では次の世代、ましてや若者の生活を支えることはできません。集落営農は後継者が限られるようになった時代の水田農業の持続という点では大きな意味がありました。しかし時間の経過とともにメンバーの高齢化が進み、その持続が困難になりつつある状況も生まれています。

単純な大規模化が困難な中山間地域で、土地を丁寧に使う農業の持続可能性はまず複合化にあると考えております。一例として集落営農組織を企業化し、水田農業に特化した状態から、周りの農地をプラスして多様な作物への転換を図り、加工施設や直売所の経営、さらにさまざまな地元の仕事を請け負う複合的な生産組織への転換を図ることが1つの可能性と考えます。ここにおいしい野菜をつくるワザを持つ高齢者や、ITやドローンなどの新しい技能を持つ若者などが、それぞれのワザを活かしてパートやフルタイムなどさまざまな形で働き、それなりの所得を得るような方向です。これがさらに仲間を広げて複数の集落にまたがって実現できるなら、それはより強固な組織体となると考えます。

このような組織の育成は優れたマネジメントあって初めて成り立つと考えますので、移住者やUターン者を含めて人材の発掘・育成は最重要事項であります。組織の育成の議論には外部の人材や有能な町村職員が関わることも不可欠だと考えておりますが、何よりも関係者の納得づくの役割分担が、強い組織を育てるものと考えております。

新しく組織をつくる時、あまりに固定した顔ぶれでは素直な議論が進みにくいと思います。かつてのわが国の農山村はそういう傾向がありました。地元の人には過去を振り返り、過去の関係にこだわるきらいがあるからであります。そこに移住者や地域おこし協力隊が加わることによって、時代に合わせた広い視野の議論が可能になると思います。そこから人材の育成や隠れていた人材の発掘の可能性も高まるのではないのでしょうか。

先ほど2つ挙げた都市にない価値のもう1つ、集落を基盤とした地域社会の支え合いについては、世帯数減少と高齢化の中で集落の機能が十分働かなくなる例が増えてきました。

そのような集落では、身近な日用の雑貨店がなくなっただけではなく、従来の支え合いのしくみを守ることが困難になってきましたが、この状況に対して過疎問題懇談会では早くから、旧小学校区ぐらいの単位で支え合うしくみとして、集落ネットワーク圏の形成を提唱して参りました。中心になる集落を小さな拠点として、日常生活に必要な機能が持続できるような体制をつくることによって、厳しい過疎集落の暮らしを守ろうというものです。

いいリーダーがいて議論が進んだ地域では、10年ほど前にすでに、旧小学校区で高齢者を通院や買い物のために輸送する仕組みがつくられています。最近では、集落単位の自治会を廃止し旧小学校区に一体化して、実働部隊として全員参加のNPOをつくっている例もあらわれています。いずれも、行政職員や外部の人を交えた徹底した話し合いによって生まれています。この体制に前に述べた複合的生産組織が一体化すれば、鬼に金棒です。

私は、社会福祉協議会を含めて、いわゆる福祉行政の視点を超えて、住民の納得による人と人が支え合う仕組みを育てることこそ、町村の、都市にはない現代の社会論的価値づくりとっております。もちろんお互いが疲れるような体制にならないためには、いろいろな人材を加えた、率直でオリジナルな発想の話し合いが必要です。

なお、平成の合併で近くの都市に合併した小さな旧村の中には、合併で埋没する危機感のもとに新たな住民組織を立ち上げ、機能的な分科会方式で地域の活性化に頑張っているところがかなりみられます。合併が引き金になったことは少し皮肉ですが、このような事例2つと住民の新しい輸送システムをつくっている団体が2つ、今年度の過疎地域優良事例表彰に輝いたことを報告させていただきます。これらはまさに、私の言う社会論的価値を高めておられる例だと思えます。

最後に学校について触れさせていただきます。全国何カ所かで、自然豊かな小さな学校で子供を育てたいと、都会から過疎の山村に移住してきた方に会いました。各地で児童数が減少する中、学校の統廃合に苦慮しておられる町村が多いと思えます。しかしこのような都会の人の発想が一部にあることも知っておいていただきたいと思えます。ただ学校の存続を考える際、単に自分が育った懐かしい校舎だから残すという議論ではなく、その学校が今の世の中に対して発揮できるどのような価値があるかを考える必要があります。それが都市にない価値であればますます存続させる価値があると私は考えます。

今年、過疎の優良事例表彰の視察で新潟県の小さな離島、粟島浦村に赴きました。ここではしおかげ留学という名で都会などからの小中学生の留学を受け入れています。馬の飼育を中心にいのちの教育をコンセプトにしています。今年度は11名の募集に30名の応募があり、高い評価を受けていることがわかります。昨年の成人式には、留学1期生が2名両親とともに参加しました。都市にはない価値を育て、それを遠くの人におすそ分けしている素晴らしい取組だと思えます。

都市が栄える一方で、低密度な安心できるくらしがしっかりと存在することが、国の底力と思えます。最後に、大きな都市にない価値をいかにして育てるかを、ぜひ町村の合言葉にさせていただきたいということをお願いして、まとめとさせていただきます。